本学競技者に関する研究（2）
—主要国際競技大会出場者とその成績（1954—95年）について—

雨ヶ崎　俊　子　　阿　江　美恵子　　掛　水　通　子

はじめに

体育教員養成を主眼としてきた本学にも、主として課外運動部活動の成果により、国際的なレベルで活躍する競技者があった。本年度（1996年）からは新教育課程の三年生以降の「競技スポーツ」コースが始動する。これを機に、われわれは諸視点からの競技者に関する研究を開始し、「本学競技者に関する研究（1）[1]」で、日本の女子競技者の総合国際競技大会参加拡大傾向を明らかにした上で、本学競技者の総合国際大会参加拡大傾向について述べた。

大学競技者の成績に関しては、例えば「東京教育大学サッカー部史[2]」のように大学運動部史の形でまとめられることが多く、大学全運動部の成績をまとめたものはあまり見られない。その中で、「専修大学スポーツ記録1933-83[3]」は全運動部の50年間の詳細な競技記録を529ページにわたってまとめている大著である。本学についてみれば、学生の卒業研究における水泳部史、体操競技部史、軟式庭球部史、フィギュアスケート部史などの中に多少の成績の記述はあるが、公刊されたものや全競技にわたるものはない。競技成績を収集し記録に残すことは競技者の健闘を讃えるとともに、今後の本学競技者について考察するための基礎資料となろう。そこで、本研究では主要国際競技大会としてオリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会、主要世界選手権大会の出場者とその成績の実際について明らかにした一覧表を作成し、本学競技者の年代別、競技別特徴について考察することを目的とする。

史料として本学学生部所蔵史料、本学後援会発行「学園便り」全号、日本体育協会および日本オリンピック委員会発行書および各大会報告書、各スポーツ団体所蔵史料、各競技者所蔵史料、女子スポーツ関係書、スポーツ雑誌等を用いた。本学競技者とは前報と同様、東京女子体育大学、同短期大学とその前身校の学生と卒業生[4]で競技会に選手として参加したものとし、本学入学以前の参加者や本学卒業生以外の教員は除外した。

1　主要国際競技大会出場者とその成績一覧表について

本学学生の競技会の記録は、各運動部で記録されて残されている場合とそうでない場合とがあり、残されている場合も不完全な部分がある。学生の競技記録は1973（昭和48）年以降は学生部に報告され「各種競技大会成績」等の名称で綴られ、それをまとめて本学後援会の「学園便り」で報告された場合もあった。近年は学生部から年度ごとに競技成績一覧表で報告されている。しかし、学生から報告されない記録もあり、また、卒業生については記録されておらず、本学競技者の国内、国際競技大会成績の全貌を把握することはできなかった。

見開きで14ページにわたる表1-1から表1-7「本学競技者の競技大会参加とその記録」はオリンピック競技大会、世界選手権大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会の本学学生および卒業生について選手として参加した者の氏名、学年または所属（就職先）、競技成績を年別にまとめたものである。世界選手権大会は競技団体や報告書等で確認できないものが多く、特に、卒業生については遺漏もあると思われるので、今後これをもとに確実なものにしていきたい。

表１－１．本学競技者の競技大会

年	オリンピック競技大会	世界選手権大会
1954年 （昭29）		第13回体操競技世界選手権大会（イタリア　ローマ） 怪我のため途中棄権　池田弘子（東女体短大教員） s.28年保体卒
1955年 （昭30）		
1956年 （昭31）	16回メルボルン大会 体操競技 団体総合　６位　個人23位 携帯器具団体徒手　６位 平均台39位　段違い平行棒22位 跳馬30位　徒手18位 池田弘子（東女体短大教員） s.28年保体卒 団体総合　６位　個人34位 携帯器具団体徒手　６位 平均台20位　段違い平行棒42位 跳馬50位　徒手35位 久保田恭子（枚岡市立大池中教員） s.29年保体卒 団体総合　６位　個人29位 携帯器具団体徒手　６位 平均台16位　段違い平行棒38位 跳馬54位　徒手22位 坂下千津子（富山商高教員） s.29年保体卒	
1957年 （昭32）		
1958年 （昭33）		第14回体操競技世界選手権大会（ソ連　モスクワ） 病気のため欠場　渡辺幸子　s.33年保体卒
1959年～ （昭34） 1964年 （昭39）		
1965年 （昭40）		
1966年 （昭41）		
1967年 （昭42）		
1968年 （昭43）	19回メキシコ大会 バレーボール　２位 井上節子（日立武蔵）s.42年保体卒 福中佐知子（〃　）s.42年保体卒	
1969年 （昭44）		第４回新体操世界選手権大会（ブルガリア　バルナ） 団体　５位 大谷佳子（東女体大教員）s.41年卒 狩野三保子　狩野史保子（日本テレビ テレビ体操）　s.44年卒 小林ひろみ　４年 川向妙子　３年　中島一美　２年 個人　なわ11位 大谷佳子（東女体大教員）s.41年卒 輪21位 大淵暢子（千葉敬愛短大教員） s.44年卒

参加とその記録

アジア競技大会	ユニバーシアード大会
	ブタペスト（ハンガリー）大会 バレーボール　6位 福中佐知子　保体1年 井上節子　保体1年
	東京（日本）大会 バレーボール　1位 井上節子（日立武蔵）　s.42年保体卒 福中佐知子（〃　）　s.42年保体卒 斎藤春枝　1年

表１－２．本学競技者の競技大会

年	オリンピック競技大会	世界選手権大会
1969年 （昭44）		徒手9位 小林ひろみ　　４年
1970年 （昭45）		第２回ソフトボール世界選手権大会（日本　大阪） １位　皆川京子　３年 大野香津代　３年
1971年 （昭46）		第５回新体操世界選手権大会（キューバ　ハバナ） 団体５位　新井真澄　植坂邦子　４年 竹下麻美　３年 小松ムツ子　長谷川洋子　２年 小柏孝子　１年 個人　21位 川向妙子（東海大教員）　s.46年卒 22位 五明みさ子（立川女子高校教員） s.46年卒 23位 小林衣代（日仏学院教員）s.46年卒
1972年 （昭47）	11回札幌冬季大会 スピードスケート　500m 21位 46"70 1000m28位 1'36"99　小野沢良子 （三協精機）　s.46年保体卒	
1973年 （昭48）		第６回新体操世界選手権大会 （オランダ　ロッテルダム） 団体７位　黒崎和子　小松ムツ子　長谷川洋子４年 小柏孝子　３年 松枝陽子　２年 内田茂子　保体２年 （補欠）阿部具子　４年 個人19位　黒川美智代　４年 17位　小林衣代（日仏学院教員） s.46年卒 世界女子スピードスケート選手権大会 500m　９位　45"82　1000m 19位 1'34"87 1500m　20位 2'29"86　小野沢良子（三協精機） s.46年保体卒
1974年 （昭49）		第８回世界トランポリン選手権大会（南アフリカ） 予選落ち 表節子　１年　竹下由美子　２年 岡田秀子　田村和子　３年 第７回女子バレーボール世界選手権大会（メキシコ メキシコシティー）１位　斎藤春枝（鐘紡）s.46年卒 世界カヌーレーシング選手権大会（メキシコ メキシコシティー） カヤックシングル　予選敗退 畑たき子（マルエツ）s.46年卒
1975年 （昭50）		第７回新体操世界選手権大会（スペイン　マドリッド） 団体２位　小柏孝子（無職）　s.50年卒 松枝陽子　菊地則子　４年 小林由美子　３年 伊佐敷順子　東島佳子　２年 （補欠）石丸祥子　石田裕子　３年 個人　輪６位　高力美登里（無職）　s.50年卒
1976年 （昭51）		第９回世界トランポリン選手権大会（アメリカ） 予選落ち 竹下由美子　川淵久枝　４年
1977年 （昭52）		第８回新体操世界選手権大会（スイス　バーゼル） 団体４位　伊佐敷順子　東島佳子　４年

参加とその記録

アジア競技大会	ユニバーシアード大会
	トリノ（イタリア）大会 体操競技　団体２位　　個人総合６位 鈴木和代（東女体大　助手）　s.44年卒 バレーボール　２位 斎藤春枝　４年 大渕優子　３年 陸上競技　やり投げ　12位　43m34 清野京子（国学院栃木高教員）s.44保体卒
	モスクワ（ソ連）大会 バレーボール　６位 橋本純子　３年 助川よし子　保体１年
第７回大会（テヘラン） バレーボール　１位 斎藤春枝（鐘紡）　s.46年卒	

表１－３．本学競技者の競技大会

年	オリンピック競技大会	世界選手権大会
1977年 （昭52）		鶴巻恵美　３年 飯田和代　保体２年 遠藤真理子　野沢恵子　２年 （補欠）榎智子 ２年　北島登子 １年 個人14位　荒尾三和子　４年 〃15位　麓久美子　１年 〃18位　小林由美子（東女体大教員） s.52年卒 フェンシング世界選手権大会（アルゼンチン　ブエノスアイレス） フルーレ団体７位　フルーレ個人２回戦敗退 淵川晶子　s.52年卒 第34回卓球世界選手権大会（イギリス　バーミンガム） シングルス４回戦敗退　黒子テル子（川崎製鉄） s.50年保体卒
1978年 （昭53）		第10回トランポリン世界選手権大会（オーストリア） 予選落ち 近藤克子　２年　竹下由美子　s.52年卒
1979年 （昭54）		第９回新体操世界選手権大会（イギリス　ロンドン） 団体４位　野沢恵子　遠藤真理子　４年 中山清美　中田弘子　岡村幸　３年 実松昌子　２年 （補欠）泉雅恵　２年 個人総合９位・リボン５位　鵜木秀子（無職） s.54年卒 〃　12位・ボール５位・こん棒８位 麓久美子　３年 〃　20位　山崎浩子　２年 （補欠）　太田倫代　３年
1980年 （昭55）	第22回モスクワ大会 フェンシング　横井晶子（広島クラブ）　s.52年卒	
1981年 （昭56）		第10回新体操世界選手権大会（西ドイツ　ミュンヘン） 団体４位　中田弘子（東京アスレティッククラブ） 岡村幸（無職）　s.56年卒 正村直美　実松昌子　平本真美　４年 小谷恭子　２年 （補欠）　中徳幸穂　３年　鎌田薫　１年 個人11位　木村貴美枝　４年 12位　山崎浩子　４年 22位　太田倫代（無職）　s.56年卒 種目別　リボン８位　山崎浩子　４年 フェンシング世界選手権大会（フランス　クレモンフェラン）　フルーレ個人　予選敗退 宮原　美江子　４年 世界カヌーレーシング選手権大会（イギリス　ノッチンガム） カヤックペア　予選敗退 清水弘子　４年 カヤックペア・シングル予選敗退　芳澤桂子４年

参加とその記録

アジア競技大会	ユニバーシアード大会
第８回大会（バンコク） 陸上競技　やり投げ　２位　54m98 渋沢奈保美　４年 やり投げ　４位　50m78 森美乃里　３年 200m　３位 25"5　400mリレー２位 46"78 櫛渕淳子　３年 100mハードル　２位　14"23 茂木多美江（小諸高教員）s.52年卒 フェンシング　フルーレ団体２位 弥富徳子　３年 テニス　シングルス３位　ダブルス準々決勝敗退 米沢そのえ（河崎ラケット）s.47年卒	
	メキシコシティー（メキシコ）大会 フェンシング　フルーレ団体・フルーレ個人　１回戦敗退　弥富徳子　４年 フルーレ団体・フルーレ個人　１回戦敗退 藤巻恵子（宇都宮商高教員）s.53年卒 フルーレ団体　１回戦敗退 角谷圭子（今別高教員）　s.54年卒 体操競技　団体４位　個人総合10位 種目別　跳馬６位　平均台８位　ゆか８位 段違い平行棒６位 樋田邦子　３年
	ブカレスト（ルーマニア）大会 体操競技　記録なし　鬼丸律子　４年 バレーボール　５位　千坂由紀乃　４年 フェンシング　フルーレ団体　１回戦敗退 大貫尚子（研究生）　s.56年卒

表１－４．本学競技者の競技大会

年	オリンピック競技大会	世界選手権大会
1982年 （昭57）		フェンシング世界選手権大会（イタリア　ローマ） フルーレ団体　フルーレ個人　予選敗退 宮原美江子（研究生）　s.57年卒
1983年 （昭58）		第11回新体操世界選手権大会 （フランス　ストラスブール） 団体　７位　小谷恭子　４年 石田礼子　菊池咲子　野元麻左 山本里佳　長野貴子　１年 （補欠）中野説子　２年　鈴木千佳代　１年 個人　27位　秋山エリカ　１年 34位　山崎浩子（研究生）s.57年卒 フェンシング世界選手権大会（オーストリア ウィーン）　フルーレ団体13位　フルーレ個人２回 戦敗退　宮原美江子（研究生）s.57年卒
1984年 （昭59）	23回ロサンゼルス大会 新体操 個人総合８位　山崎浩子（研究生） s.57年卒 個人総合13位　秋山エリカ　２年 フェンシング　フルーレ団体　８位 フルーレ個人　30位 宮原美江子（研究生）s.57年卒 陸上競技　やり投げ予選９位 56m60 森美乃里（習頭中教員） s.55年卒	
1985年 （昭60）		第19回世界カヌーレーシング選手権大会（メヘレン ベルギー） カヤックペア　予選敗退 中里晴美（上九一色中教員）s.60年卒 堀田育子　３年 カヤックフォア　予選敗退 原田夕起子（倉吉マロン）s.60年卒 中里晴美（上九一色中教員）s.60年卒 小峰英子　保体２年　堀田育子　３年 フェンシング世界選手権大会（スペイン　バルセロナ） フルーレ予選敗退　長谷川一美　３年 第12回新体操世界選手権大会（スペイン　バリャドリッド） 団体６位　吉岡紀子　埜田里美　４年 長野貴子　山本里佳　鈴木千佳代　３年 川崎弥生　１年 個人総合19位　大塚裕子　１年 〃　30位　秋山エリカ　３年 〃　35位　浜田桂子　３年
1986年 （昭61）		第14回トランポリン世界選手権大会 ４位　菱順子　３年 第20回世界カヌーレーシング選手権大会（カナダ モントリオール） 予選敗退　中里晴美（上九一色中教員）s.60年卒 古森ひろ子　堀田育子　４年 小峰英子　３年 フェンシング世界選手権大会（ブルガリア　ソフィア） フルーレ団体17位　フルーレ個人予戦敗退　高柳裕子 ３年　宮原美江子（ザ・スポーツコネクション） s.57年卒　中山清美　金澤真利子 s.60年卒 第６回世界女子ソフトボール選手権大会 （ニュージーランド　オークランド） ８位　後藤智恵子　保体１年 尾野省子　神宮好　３年 高橋美奈子　鈴木久美　２年

参加とその記録

アジア競技大会	ユニバーシアード大会
第９回大会（ニューデリー） 陸上競技　やり投げ　３位　54m70 森美乃里（鳥取大附中教員）s.55年卒	
	エドモントン（カナダ）大会 フェンシング フルーレ団体８位　フルーレ個人１回戦敗退 宮原美江子（研究生）s.57年卒 記録なし 中山清美　s.60年卒
	神戸（日本）大会 体操競技　補欠　永松奈津美　保体１年 陸上競技　200m 400m 予選敗退　1600mリレー６位 小野富美子　１年 400mハードル　予選敗退 山本玲子　３年 1500m　予選敗退 田島由紀子　２年 やり投げ　予選１６位敗退 43m82 山本久美　２年 水泳　400m自由形 12位 4'32"76　800m自由形予選敗退 800mリレー５位 8'42"34　松木扶美子　保体２年 100m自由形 20位 1'00"82　200m自由形予選敗退 400mリレー8位4'04"28　800mリレー5位 8'42"34 高橋真紀子（山梨県庁）　s.60年保体卒 フェンシング フルーレ団体９位　フルーレ個人予選敗退 宮原美江子（ 明星大３年） s.57年卒 中山清美（東京電力）　s.60年卒 金澤真利子（和歌山県教育委員会）　s.60年卒
第10回大会（ソウル） 陸上競技　競歩　10km　３位 51'12" 平山秀子　３年 記録なし　小野富美子 ２年 フェンシング　フルーレ団体３位 高柳裕子　３年 フルーレ団体３位　フルーレ個人４位 宮原美江子（ザ・スポーツコネクション）　s.57年卒 フルーレ団体３位 〃　個人２回戦敗退10位 中山清美（東京電力）s.60年卒 フルーレ団体３位 金澤真利子（和歌山県教育委員会）s.60年卒	

表１－５．本学競技者の競技大会

年	オリンピック競技大会	世界選手権大会
1987年 （昭62）		第13回新体操世界選手権大会（ブルガリア バルナ） 団体５位　ボールと輪４位 駒井留美子　横川由美　４年 川崎弥生　３年 荘司芳子　高田惣子　２年 杉山陽子　１年 （補欠）配島里香　吉田美保　１年 個人総合16位　秋山エリカ（研究生）s.62年卒 〃　43位　大塚裕子　３年 第２回世界陸上競技選手権大会（イタリア　ローマ） 10km競歩　49'50" 28位　平山秀子　４年 第21回世界カヌーレーシング選手権大会（西ドイツ デュースブルグ） 予選敗退　小林美幸　２年　小峰英子　４年 原田夕起子（倉吉マロン）　中里清美（上九一色中教員）　s.60年卒 第１回世界女子ウェイトリフティング選手権大会（アメリカ　デイトナビーチ） 75kg級８位 トータル170kg　長谷場久美（埼玉栄高教員）　s.61年卒
1988年 （昭63）	第24回大会（ソウル） 新体操 個人総合15位　秋山エリカ（研究生）s.62年卒 個人総合27位（予選落ち） 大塚裕子　４年 カヌー カヤックペア　予選落ち 小林美幸　３年 中里晴美（上九一色中教員）s.59年卒 フェンシング フルーレ団体・個人　予選落ち 宮原美江子（宮原商店）s.57年卒	第２回世界女子ウェイトリフティング選手権大会（インドネシア　ジャカルタ） 67.5kg級７位　トータル172.5kg　長谷場久美（埼玉栄高教員）s.61年卒
1989年 （平１）		第14回新体操世界選手権大会（ユーゴスラビア サラエボ） 団体６位　輪とリボン７位　こん棒７位 荘司芳子　４年 赤堀綾子　神谷博子　船本理恵　３年 高田佳寿子　柳田裕子　横矢博子　２年 及川麻子　１年 個人８位　秋山エリカ（東女体大助手）　s.62年卒 第３回世界女子ウェイトリフティング選手権大会（イギリス） 67.5kg級５位　トータル170.0kg　長谷場久美（埼玉栄高教員）　s.61年卒 フェンシング世界選手権大会（アメリカ　デンバー） フルーレ団体13位　フルーレ個人40位 高柳裕子(石川県教育委員会）s.63年卒
1990年 （平２）		第４回世界女子ウェイトリフティング選手権大会（ユーゴスラビア　サラエボ） 67.5kg級４位　トータル195kg　長谷場久美（埼玉栄高教員）　s.61年卒 フェンシング世界選手権大会（フランス　リヨン） フルーレ団体12位　フルーレ個人31位 高柳裕子（石川県教育委員会）s.63年卒

参加とその記録

アジア競技大会	ユニバーシアード大会
	ザグレブ（ユーゴスラビア）大会 体操競技　団体５位　個人27位　澤井美穂　１年 カヌー　カヤックシングル　一回戦敗退 小林美幸　２年
	デュースブルグ（西ドイツ）大会 フェンシング　フルーレ団体9位　フルーレ個人45位 髙柳裕子（石川県教育委員会）　s.63年卒
第11回大会（北京） 陸上競技　400m６位　55"08　400mリレー４位 45"67　1600mリレー５位　3'40"65 小野富美子(大昭和)　H.1年卒 10km競歩　３位　47"09 増田房子（カトー産業（株））　H.2年卒 カヌー　カヤックペア２位　カヤックフォア３位 新井久美　４年 カヤックフォア３位　望月奈津美　４年 カヤックシングル４位　カヤックペア２位	

表１－６．本学競技者の競技大会

年	オリンピック競技大会	世界選手権大会
1990年 （平２）		
1991年 （平３）		第15回新体操世界選手権大会（ギリシア　アテネ） 団体６位　リボン６位、なわ・ボール５位 柳田裕子　桐山ひとみ　横矢博子　４年 上原有美　松野智加　及川麻子　３年 野田英子　増田葉子　１年 個人23位　川本ゆかり　１年 〃43位　大久保智美　１年 〃46位　藤野朱美　２年 第５回世界女子ウェイトリフティング選手権大会（ドイツ　ドナウシンゲン）67.5kg級トータル197.5kg２位 長谷場久美(埼玉栄高教員)　s.61年卒 フェンシング世界選手権大会（ハンガリー　ブタペスト） フルーレ団体12位　フルーレ個人42位　高柳裕子 （石川県教育委員会）s.63年卒 世界カヌーレーシング選手権大会（フランス　パリ） 小林美幸（造研）H.2年卒　田村さとみ　１年
1992年 （平４）	第25回大会（バルセロナ） 新体操　予選落ち 川本ゆかり　２年 陸上競技 10km競歩　24位　47'43" 佐藤優子（資生堂）H.2年卒 フェンシング　フルーレ個人予選敗退 高柳裕子(香川県スポーツ振興財団) s.63年卒 カヌー　カヤックペア　準決敗退 小林美幸（造研）H.2年卒	第17回世界トランポリン選手権大会 （ニュージーランド） 個人21位　西川昌美　２年 第16回新体操世界選手権大会（ベルギー　ブリュッセル）　団体９位　種目別　リボン７位 柳田裕子　H.3年卒 及川麻子　松野智加　４年 野田英子　増田葉子　小林千代　２年 鈴木麻由美　尾谷ゆき子　１年 個人16位　川本ゆかり　２年 個人24位　大久保智美　２年 第６回世界女子ウェイトリフティング選手権大会（ブルガリア　バルナ）　75kg級トータル205kg２位 長谷場久美(埼玉栄高教員)　s.61年卒
1993年 （平５）		第17回新体操世界選手権大会（スペイン　アリカンテ） 個人国別対抗８位　川本ゆかり　３年 大久保智美　３年 山尾朱子　１年 個人15位　川本ゆかり　３年 第７回世界女子ウェイトリフティング選手権大会（オーストラリア　メルボルン）　75kg級トータル207.5kg ２位　長谷場久美(埼玉栄高教員)　s.61年卒 フェンシング世界選手権大会（ドイツ　ボン） フルーレ団体・個人 柳澤純子（山梨県スポーツ振興事業団）H.4年卒
1994年 （平６）		第18回新体操世界選手権大会（フランス　パリ） 団体５位　種目別　輪・こん棒５位　なわ５位 野田英子　増田葉子　石三香織　４年 尾谷ゆき子　３年

参加とその記録

アジア競技大会	ユニバーシアード大会
カヤックフォア３位　小林美幸（造研） H.2年卒 ハンドボール　５位 村山みどり　４年 ソフトボール　２位 組島千登美（日本電装）　s.55年卒 フェンシング フルーレ団体３位　フルーレ個人７位 宮原美江子(ユーアイツアー) s.57年卒 〃 団体３位　高柳裕子(石川県教育委員会) s.63年卒 ウェイトリフティング　67.5kg級トータル190kg ２位 長谷場久美(埼玉栄高教員) s.61年卒	
	シェフィールド（イギリス）大会 新体操　個人総合４位　種目別　なわ２位　輪２位 こん棒５位 川本ゆかり　１年 個人総合 ７位　種目別　輪７位　ボール８位 こん棒６位 藤野朱美　２年
	ザコパネ（ポーランド）冬季大会 ショートトラックスピードスケート 500m・1500m・1000m　準決敗退　田中千景　２年 3000m 予選敗退　〃 3000mリレー　４位　〃 バッファロー（アメリカ）大会 バレーボール　４位　今野裕美子　２年 フェンシング　フルーレ団体６位　フルーレ個人 予選敗退　柳澤純子（山梨県民スポーツ事業団）H.4年卒 サッカー　６位 佐藤恵子（旭国際開発）　H.4年保体卒
第12回大会（広島） 陸上競技　砲丸投げ　６位　16m21 篠崎浩子　４年 新体操　個人１位　川本ゆかり　４年	

表１－７．本学競技者の競技大会

年	オリンピック競技大会	世界選手権大会
		竹内忍　斎藤容子　加藤有美　　２年 髙星寿子　　１年 個人21位　山尾朱子　２年 第８回世界女子ソフトボール選手権大会（カナダ） ７位　大島慈子　　４年 第８回世界女子ウェイトリフティング選手権大会 （トルコ　イスタンブール） 出場辞退　長谷場久美（埼玉栄高教員）　s.61年卒 フェンシング世界選手権大会（ギリシア　アテネ） フルーレ団体12位　フルーレ個人28位　髙柳裕子（香川県スポーツ振興財団）　s.63年卒 エペ　久保紀子　　４年 世界カヌーレーシング選手権大会（メキシコ） カヤックペア　予選敗退　小林美幸（造研）H.2年卒
1995年 （平７）		第19回新体操世界選手権大会（オーストリア　ウィーン） 団体10位　団体種目別フープ８位 尾谷ゆき子　　４年 竹内忍　斎藤容子　　３年 青柳小百合　四宮友加里　畑小百合　１年 個人24位　山尾朱子　３年 第12回ハンドボール世界選手権大会（オーストリア、ハンガリー）　13位　児島愛　２年 今野清美（大崎電気）H.5年卒 村山みどり（シャトレーゼ）　H.3年卒 第９回世界女子ウェイトリフティング選手権大会 （中国） 70kg級トータル202.5kg　５位 長谷場久美（埼玉栄高教員）　s.61年卒

・1980年のオリンピックモスクワ大会は選手は決定したが、不参加であった。
・カヌーの種目は全て距離500mである。
・開催地、開催回数、現職、成績の記入のないものは収集できなかった（フェンシングは開催回数を称しない）。
・卒は東京女子体育大学卒業、保体卒は東京女子体育短期大学卒業である。
・この表は各種資料から独自に作成したものである。

参加とその記録

アジア競技大会	ユニバーシアード大会
ウェイトリフティング 76kg級トータル207.5kg　２位 長谷場久美（埼玉栄高教員）　s.61年卒 ソフトボール　２位　大島慈子　４年 ハンドボール　２位　村山みどり （シャトレーゼ）　H.3年卒 陸上競技　10km競歩　３位 46'51" 佐藤優子(資生堂)　H.2年卒 フェンシング　フルーレ団体２位　フルーレ個人 準々決勝敗退　高柳裕子（香川県スポーツ振興財団）s.63年卒 カヌー　カヤックペアー２位 小林美幸（群馬女子短大付高教員）H.2年卒 記録なし　由谷恵（無職）　H.6年卒	
	ハカ（スペイン）冬季大会 ショートトラックスピードスケート 1500m８位　3000m７位　田中千景　３年 500m 1000m 1500m予選落ち　小原貴枝　３年 3000mリレー　４位　田中千景・小原貴枝　３年 福岡（日本）大会 陸上競技　800m　予選落ち　1600mリレー７位　3'38"91 玉手由子　４年 マラソン　１位　2時間53'03" 草萱昌子（日本電装）　H.6年卒 砲丸投げ　決勝での記録なし　篠崎浩子 （福島西高教員）H.7年卒 バレーボール　２位　今野裕美子　４年 体操競技　団体総合５位　岡真紀子　３年 新体操　個人総合５位　なわ６位　ボール６位 こん棒５位　リボン５位　山尾朱子　３年 フェンシング　エペ予選落ち　久保紀子（福島県教育委員会）H.7年卒

2　主要国際競技大会出場者とその成績の年代別、競技別特徴について

主要国際競技大会出場者とその成績の年代別、競技別特徴について、その概要を述べる。紙幅の都合で全出場者には言及できないので一覧表を参照願いたい。

国際大会初出場から本研究が扱っている1995（平成7）年までの41年間は三期に分けることができよう。第一期は1970（昭和45）年以前、すなわち、60年代までである。戦後に初出場を遂げて後、1970（昭和45）年頃まで体操とバレーボールにおいて国際競技大会で活躍する期である。

第二期は1970（昭和45）年から1983（昭和58）年までの多様化時代で陸上競技、ソフトボール、スピードスケート、トランポリン、カヌー、フェンシング、卓球、テニスが出場開始した。

第三期は1984（昭和59）年ロサンゼルスオリンピック以降の活躍時代と新競技（水泳、ウエイトリフティング、ハンドボール、サッカー）の出場開始の時代である。

（1）第一期、1954（昭和29）年の初出場から1960年代の体操、バレーボール時代

1902（明治35）年に設立された本学は当初、選手養成はしてこなかった。特に、1908（明治41）年から1955（昭和30）年まで、第4代目の設立者・校長を勤めた藤村トヨは対外試合の出場を規制していたから、戦前、戦中は国際競技大会に出場する者はなかった。前報で報告したようにドイツ留学後、トヨは器械体操は女子の健康を損ねることがないからと競技会出場を許した。これが本学の体操の活躍へと結びついてくる。

本学競技者の初の国際競技大会出場者は1954（昭和29）年、第13回ローマ世界体操選手権大会に出場した池田弘子（当時本学教員）であった。これは田中敬子と二人でのわが国女子初の国際大会出場でもあった。池田は残念ながら段違い平行棒の着地で脚をくじき途中棄権する[5]が翌々年のオリンピックでは入賞を果たすことになる。1958（昭和33）年の第14回モスクワ世界体操選手権大会には、短大卒業生渡辺幸子が選ばれたが、病気のため欠場した。

本学初のオリンピック出場者は日本女子体操初参加の大会である1956（昭和31）年第16回メルボルン大会体操の池田弘子、久保田恭子、坂下千津子の3人である。3人とも、当時は本学には四年制大学はなかったので短大を卒業後教員をしていた時の参加であった。代表は6人で、他は日本体育大と東京教育大の学生であった。3人とも、個人の順位は振るわなかったが、団体総合と団体徒手で6位入賞した。団体徒手がオリンピックで行われたのはこの大会と前回のヘルシンキ大会のみでその後団体徒手は新体操へと移行していった。

1969（昭和44）年の第4回新体操世界選手権大会日本初出場の選手はすべて本学競技者であった。卒業生3名、学生3名から成る団体は5位に入賞し、「東洋の新風きたると注目をあびた。」[6]と記録されている。この時の卒業生の大谷佳子（現姓加茂）、狩野史保子（現姓関田）は現在本学教員であると同時に、新体操界で活躍している。狩野三保子（現姓安達）は新体操読売安達教室を主宰し多くの選手を育てている。新体操がオリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会競技種目になるのは第三期以降なので国際的活躍の場は世界選手権大会であった。

本学初のユニバーシアード大会出場者は1965（昭和40）年ブタペスト大会バレーボールの井上節子と福中佐知子であった。二人はともに短大1年生での出場であり、6位に入賞した。卒業後そろって日立製作所武蔵工場に入社し、日立武蔵チームで活躍する。1967（昭和42）年ユニバーシアード東京大会に優勝し、ついには、1968（昭和43）年第19回メキシコオリンピックに出場を果たし銀メダルを獲得した。1967（昭和42）年ユニバーシアード東京大会には大学1年の斎藤春枝も出場し、斎藤は第二期にも活躍し、バレーボールの伝統は引き継がれる。

（2）第二期、1970（昭和45）年から1983（昭和58）年までの多様化時代
　ー陸上競技、ソフトボール、スピードスケート、トランポリン、カヌー、フェンシング、卓球、テニスの出場開始ー

1970（昭和45）年から1983（昭和58）年までが第二期である。この期は、これまでの体操、バレーボールに加えて多くの競技が主要国際大会出場を果たし始める多様化時代ととらえることができる。

前期からの体操は、1970（昭和45）年ユニバーシアードトリノ大会で本学教員であった鈴木和代が、団体総合2位、個人総合6位に入賞し、1979（昭和54）年メキシコシティー大会では大学3年の樋田邦子が団体総合4位、種目別の跳馬と段違い平行棒で6位に入賞した。新体操は、世界選手権大会団体、個人に毎回本学競技者が出場し続け、1975年第7回大会では強国の不参加から団体2位の成績を収め他の大会も4、5位の成績であった。個人では1975年第7回大会輪6位の高力、1979年第9回大会ボール5位の麓、リボン5位の鵜木などが上位である。この期の出場者の多くは現在の新体操界の指導者となっている。1971年第5回大会、1973年第6回大会団体の長谷川洋子、同じく第5回大会、第6回大会個人の小林衣代（現姓高橋）、第7回大会団体、第8回大会個人の小林由美子（現姓津城）、1983年第11回大会個人で国際大会初出場しその後二回のオリンピック競技大会に出場する秋山エリカは何れも現在本学教員である。また、オリンピック選手団等ナショナルチームコーチとして活躍する五明みさ子も1971年第5回大会個人に出場している。

バレーボールでは前期に活躍した斎藤が1970（昭和45）年に大学4年で二度目のユニバーシアード大会で銀メダルを獲得し、卒業後は実業団の鐘紡チームで活躍した。息の長い選手生活でついには全日本チームのまとめ役、ムードメーカーとして、1974年のメキシコでの第7回女子バレーボール世界選手権大会、アジア競技大会第7回テヘラン大会ともに金メダルを獲得した[7]。ユニバーシアード大会、アジア大会、世界選手権大会と三個の金メダルを獲得した者は本学には他にはいない。斎藤は本学競技者初のアジア大会出場競技者でもあった。この期にバレーボールでは大渕優子、橋本純子、助川よし子、千坂由紀乃が活躍する。

この期にオリンピック競技大会出場を果たしたのはスピードスケートのみである。1972（昭和47）年第11回札幌大会に500m、1000mに卒業生小野沢良子が出場し、今日（1996年）までの本学唯一の冬季オリンピック競技大会出場者となった。小野沢は短大時代、500mでインカレ２連勝し昭和46年に卒業、当初は国際的競技者ではなかったが、スケートの名門三協精機に入社して力をつけ、1973年の世界選手権にも3種目出場し、500m9位という成績を残した[8]。

陸上競技初の国際大会出場者は1970年ユニバーシアードトリノ大会のやり投げの清野京子であった。清野は短大を卒業後教員をしていた時の参加であった。この後多くの国際大会出場を果たす投擲選手のパイオニアでもある。陸上競技はアジア競技大会では1978年バンコク大会から、すべての大会に出場している。最も多くの選手が出場したのがバンコク大会で、やり投げで4年生の渋沢奈保美が2位、3年生の森美乃里が4位、3年生の櫛渕淳子は200mで3位、400mリレーで2位、卒業生の小諸高校教員茂木多美江は100mハードルで2位と全員が入賞を果たした。1982年第9回ニューデリー大会では卒業し鳥取大学教育学部附属中教員となっていた森が再度やり投げで3位に入賞した。

1970（昭和45）年には第2回ソフトボール世界選手権大会に大学3年の皆川京子、大野香津代が出場し優勝した。ソフトボールのアジア競技大会採用は1990年、オリンピックは本年（1996年）からであり、ユニバーシアード大会には採用されていないので、この期に国際的活躍はこの他にはできなかった。

1974（昭和49）年には第8回世界トランポリン選手権大会に学生4名が出場し、以後毎回のように出場するが世界の壁は厚かった。トランポリンも国際的活躍の場は世界選手権だけであった。

カヌーの本学競技者は、前期の東京オリンピックにもう一歩というところで出場を逃していた。その後、日本はオリンピックに長い間出場しなかったので本学競技者初の主要国際競技大会出場は、1974年の世界選手権大会であった。卒業生の畑たき子が出場したが、世界との差をみせつけられた。1981年の世界選手権に出場した清水、芳澤も予選で敗退した。しかし、これらは次期のオリンピック競技大会、アジア競技大会の連続出場の基盤となった。

フェンシングでは1977（昭和52）年世界選手権に卒業生の淵川晶子が初出場し、ほぼ毎回本学から出場している。淵川は結婚後横井晶子として1980年第22回モスクワオリンピックの「幻のオリンピック選手」となった。1978年第8回バンコクでのアジア競技大会に大学3年弥富徳子が出場し、ユニバーシアード大会では1979年メキシコシティーに弥富、藤巻恵子、角谷圭子、81年ブカレストに大貫尚子、83年エドモントンに宮原美江子、中山清美と毎回出場し、次期のオリンピック出場の基礎を作る。

1977年の第34回卓球世界選手権大会に、短大卒業後川崎製鉄で活躍していた黒子テル子が出場を果たし、シングルスで4回戦まで進出した。黒子は1974（昭和49）年に短大2年生で全日本学生選手権を制していた。本学卓球で主要国際競技大会に出場したのは黒子のみである。

1978年の第8回バンコクでのアジア競技大会はテニス初の主要国際大会出場の大会となった。テニスの米沢そのえは大学時代軟式テニス（現ソフトテニス）で、高校からのペア中田美登利と組んでタイトルを総なめにした。卒業後は河崎ラケットに勤務し硬式テニスに転向、1978年には全日本テニス選手権シングルス、ダブルスで優勝、ダブルスでは1980年にも優勝している。アジア競技大会ではシングルスで銀メダルを獲得した。本学テニスで主要国際大会で活躍したのは米沢のみである。

（3）第三期　1984（昭和59）年ロサンゼルスオリンピック以降の活躍時代と新競技（水泳、ウエイトリフティング、ハンドボール、サッカー）の出場開始

オリンピック競技大会においても、アジア競技大会においても除々に女子競技が拡大したが、特にオリンピック競技大会においては1984年第23回ロサンゼルス大会以降、アジア競技大会においては1986年第10回のソウル大会以降急激に拡大した。これは、従来男子のみに行われていた競技にも女子が進出する場合が多くなったからである。このころから女子スポーツがさらに発展したとみることができる。本学においても、この世界の流れの中で、オリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニーバーシアード大会の全大会のいずれかの競技には選手を送り、競技数も増やし、さらに各種世界選手権大会にも出場している。したがって、1984（昭和59年）以降を国際的に活躍する第三期とみなすことができよう。

この期には12競技が主要国際競技大会に出場している。これらの競技を、従来から引き続き出場している競技（体操、バレーボール、フェンシング、陸上競技、カヌー、トランポリン）、出場しない期間をおいて再出場した競技(スケート、ソフトボール)、新しく出場開始した競技（水泳、ウエイトリフティング、ハンドボール、サッカー）に分けて述べる。

①従来から引き続き出場している競技
（体操、バレーボール、フェンシング、陸上競技、カヌー、トランポリン）

一期、二期に引き続き、新体操は毎回世界選手権大会に出場し、団体では5、6位が多い。個人では1989年第14回大会の秋山エリカの8位が最高である。この期に入ると、総合国際競技大会で新体操個人種目が採用されるようになり活躍の場が拡大した。本学競技者のいずれかが全大会に出場した。1984の第23回ロサンゼルス大会がその始めであり、卒業し研究生であった山崎浩子と2年生の秋山が出場、この大会は新体操王国のソ連、東欧諸国不参加ということもあり、山崎が8位入賞を果たした。1988年の第24回ソウルオリンピックには研究生秋山と4年生大塚裕子が出場、1992年第25回バルセロナオリンピックには2年生の川本ゆかりが出場した。1992年のシェフィールドのユニバーシアードでも初めて採用され、1年生川本と2年生の藤野朱美が出場し、川本が個人総合4位、藤野が7位に入賞し、種目別でも上位に入賞した。1994年第12回広島アジア大会でも採用され、4年生になった川本が金メダルを獲得し、学生時代にすべての主要国際競技大会に出場を果たし引退した。川本後、3年生山尾朱子が1995年福岡ユニバーシアード大会に出場し、個人総合5位、種目別でも上位に入賞し伝統を守った。

体操競技はジュニア選手の台頭により本学競技者はユニバーシアード大会を活躍の舞台とし、1987年のザクレブ大会では1年生澤井美穂が、1995年福岡大会で3年生岡真紀子がともに団体総合で5位に入賞

した。

伝統のあるバレーボールも国際大会での活躍選手は高校卒の実業団選手が主流となり、体操競技同様本学競技者はユニバーシアード大会で活躍する。2年生で1993年バッファロー大会、4年生で1995年福岡大会選手となった今野裕美子は、福岡大会で銀メダルを獲得した。

フェンシングでは、前期から活躍していた当時研究生の宮原が1984年23回ロサンゼルスオリンピック大会においてフルーレ団体で8位入賞を果たした。宮原は前報で報告したように、本学競技者中、最多の総合国際競技大会出場を果たした競技者である。ロサンゼルスと1988年第23回ソウル大会の二度のオリンピック競技大会、1986年第10回ソウル（フルーレ団体3位、個人4位）と1990年第11回北京の二度のアジア競技大会、1983年エドモントンと1985年神戸の二度のユニバーシアード大会、これらはすべて卒業後のことである。世界選手権大会には1981年に大学4年で初出場後、82年、83年、86年と四度出場した。宮原は10年間日本のトップを維持し続けた。それに続くのが高柳裕子である。五度の世界選手権、三度のアジア大会、一度ずつのオリンピックとユニバーシアード大会である。1986年に世界選手権とソウルオリンピックに出場後9年目の1994年広島アジア大会ではフルーレ団体で銀メダルを獲得した。フェンシングでは、他にもこの期に、長谷川一美、中山清美、金澤真理子、柳澤純子、久保紀子が国際大会で活躍する。国際大会日本選手団にはほぼ全回本学競技者が入っている。

陸上競技も前期から引き続き活躍する。1984年第23回ロサンゼルス大会ではやり投げの森美乃里が陸上競技初のオリンピック選手となり、1992年第25回バルセロナ大会には10ｋｍ競歩の卒業生佐藤優子が出場する。佐藤は1994年第12回広島アジア大会にも出場する。この期には、長距離の選手が活躍し始めており、10ｋｍ競歩では3年生の平山秀子は1986年第10回ソウルアジア大会3位、1987年第2回世界選手権にも出場する。1990年第11回北京アジア大会では卒業生増田房子が10ｋｍ競歩で3位となった。1995年福岡ユニバーシアード大会マラソンでは高温多湿の悪条件を乗り越え、卒業生草萱昌子が優勝した。短距離では小野富美子の活躍がある。アジア競技大会2回、ユニバーシアード大会1回に出場し、北京アジア大会では1600mリレー5位、400m6位に入賞した。投擲においては、4年生篠崎浩子が1994年広島アジア大会で6位入賞し、1995年ユニバーシアード大会にも出場した。

カヌーはこの期に国際大会出場の機会が増えた。東京オリンピック以来途絶えていたオリンピックに、日本女子競技者は1988年第24回ソウル大会以後出場し、アジア競技大会でも1990年第11回北京大会から採用された。ユニバーシアード大会では1987年のみの実施で小林美幸が出場した。小林はソウル、バルセロナのオリンピックと北京、広島のアジア大会にも出場し、フェンシングの宮原に次ぐ巡回競技者[9]である。1988年第24回オリンピックソウル大会では中里晴美とともにカヤック・ペア500mに出場、バルセロナでもペアに出ている。1990年第11回北京アジア競技大会でカヤック・ペア500mで新井久美と漕いで2位、新井、望月奈津美らとカヤック・フォー500mで3位、同シングルで4位に入賞し、広島アジア大会ではカヤック・フォー500mで2位となっている。その他に堀田、原田、小峰、田村らが世界選手権に出場した。

トランポリンでは1986年第14世界選手権で3年生菱順子が4位となり、第17回大会には西川が出場した。

②出場しない期間をおいて再出場した競技

（スケート、ソフトボール）

スケートは1972年第11回札幌冬季オリンピック、73年世界選手権大会出場の小野沢以降国際大会での活躍がみられなかったが、1993年の冬季ザコパネ大会ショートトラックスピードスケートに2年生田中千景が6種目に出場し、3000mリレーで4位に入賞、3年生になり1995年冬季ハカ大会にも3種目に出場し、再び3000mリレーで4位に入賞した。ハカでは、3年生の小原貴枝も4種目に出場し、3000mリレーで4位に入賞した。

ソフトボールも1970年の第2回世界選手権以来長く国際舞台登場の機会がなかった。久しぶりに、

表2　オリンピック競技大会本学競技者入賞者

	金メダル（優勝）	銀メダル（2位）	銅メダル（3位）	4位	5位	6位			
16回　1956 ﾒﾙﾎﾞﾙﾝ						（体操・団体総合） 池田弘子（卒） 久保田恭子（卒） 坂下千津子（卒） （体操・団体徒手） 池田弘子（卒） 久保田恭子（卒） 坂下千津子（卒）			
19回　1968 ﾒｷｼｺｼﾃｨｰ		（バレーボール） 井上節子（卒） 福中佐知子（卒）					7位	8位（この回から八位まで入賞）	
23回　1984 ﾛｻﾝｾﾞﾙｽ								（体操・新体操個人総合） 山崎浩子（卒） （フェンシング・フルーレ団体） 宮原美江子（卒）	
計	0	1（2人）	0	0	0	2（延6人、実質3）	0	2（2人）	5（10人）

注）　（卒）は卒業生である。（卒）が記されていない名は学生である。　　（実人数7人）

表3　アジア競技大会本学競技者入賞者

	金メダル（優勝）	銀メダル（2位）	銅メダル（3位）	4位	5位	6位		
7回 1974 ﾃﾍﾗﾝ	（バレーボール） 斎藤春枝（卒）							
8回 1978 ﾊﾞﾝｺｸ		（陸上競技・やり投げ） 渋沢奈保美 （陸上競技・100mﾊｰﾄﾞﾙ） 茂木多美江（卒） （陸上競技・400mﾘﾚｰ） 櫛渕淳子 （ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ団体） 弥富徳子	（陸上競技・200m） 櫛渕淳子 （テニス・ｼﾝｸﾞﾙｽ） 米沢そのえ（卒）	（陸上競技・ やり投げ） 森美乃里				
9回 1982 ﾆｭｰﾃﾞﾘｰ			（陸上競技・やり投げ） 森美乃里（卒）				7位	8位
10回 1986 ｿｳﾙ			（陸上競技・10km競歩） 平山秀子 （ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ団体） 宮原美江子（卒） 中山清美（卒） 金澤真利子（卒） 高柳裕子	（ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ ﾌﾙｰﾚ個人） 宮原美江子（卒）				
11回 1990 北京		（ｶﾇｰ・ｶﾔｯｸﾍﾟｱ500m） 小林美幸（卒） 新井久美 （ｳｴｲﾄﾘﾌﾃｨﾝｸﾞ・67.5ｷﾛ級） 長谷場久美（卒） （ソフトボール） 粗島千登美（卒）	（陸上競技・10km競歩） 増田房子（卒） （ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ団体） 宮原美江子（卒） 高柳裕子（卒） （ｶﾇｰ・ｶﾔｯｸﾌｫｰ500m） 小林美幸（卒） 新井久美 窪月直津美	（ｶﾇｰ・ｶﾔｯｸ ｼﾝｸﾞﾙ500m） 小林美幸（卒）	（陸上競技・ 1600mﾘﾚｰ） 小野富美子（卒） （ﾊﾝﾄﾞﾎﾞｰﾙ） 村山みどり	（陸上競技・ 400m） 小野富美子（卒）	（ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ ﾌﾙｰﾚ個人） 宮原美江子（卒）	
12回 1994 広島	（体操・新体操 個人総合） 川本ゆかり	（ｳｴｲﾄﾘﾌﾃｨﾝｸﾞ・76ｷﾛ級） 長谷場久美（卒） （ハンドボール） 村山みどり（卒） （ソフトボール） 大島慈子 （ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ﾌﾙｰﾚ団体） 高柳裕子（卒） （ｶﾇｰ・ｶﾔｯｸﾌｫｱ500m） 小林美幸（卒）	（陸上競技・10km競歩） 佐藤優子（卒）			（陸上競技・ 砲丸投げ） 篠崎浩子		
	2	12（13）	9（15人）	3	2	2	1	0

注）　（卒）は卒業生である。（卒）が記されていない名は学生である。　　計 31（38人）
（実人数24人）

表4　ユニバーシアード大会本学競技者入賞者

	金メダル（優勝）	銀メダル（2位）	銅メダル（3位）	4位	5位	6位	7位	8位
1965 ﾌﾞﾀﾍﾞｽﾄ						（バレーボール） 福中佐知子 井上節子		
1967 東京	（バレーボール） 井上節子（卒） 福中佐知子（卒） 斎藤春枝							
1970 ﾄﾘﾉ		（バレーボール） 斎藤春枝 大渕優子 （体操・団体総合） 鈴木和代（卒）				（体操・ 個人総合） 鈴木和代（卒）		
1973 ﾓｽｸﾜ						（バレーボール） 橋本純子 助川よし子		
1979 ﾒｷｼｺｼﾃｨｰ				（体操・ 団体総合） 樋田邦子		（体操・跳馬） 樋田邦子 （体操・段違い 平行棒） 樋田邦子		
1981 ﾌﾞｶﾚｽﾄ					（バレーボール） 千坂由紀乃			
1985 神戸					（水泳・800mﾘﾚｰ） 松木英美子 高橋真紀子	（陸上競技・ 1600mﾘﾚｰ） 小野富美子		（水泳・ 400mﾘﾚｰ） 高橋真紀子
1987 ｻﾞｸﾚﾌﾞ					（体操・団体総合） 澤井美穂			
1991 ｼｪﾌｨｰﾙﾄﾞ		（体操・新体操 種目別、輪） 川本ゆかり （体操・新体操 種目別、なわ） 川本ゆかり		（体操・新体操 個人総合） 川本ゆかり	（体操・新体操 種目別、こん棒） 川本ゆかり	（体操・新体操 種目別、こん棒） 藤野朱美	（体操・新体操 個人総合） 藤野朱美 （体操・新体操 種目別、輪） 藤野朱美	（体操・新体操、種目別 ボール） 藤野朱美
1993冬 ｻﾞｺﾊﾞﾈ				（ｽｹｰﾄ・ｼｮｰﾄﾄﾗｯｸ 3000mﾘﾚｰ） 田中千景			（ｽｹｰﾄ・ｼｮｰﾄ ﾄﾗｯｸ3000m） 田中千景	（ｽｹｰﾄ・ｼｮｰﾄ ﾄﾗｯｸ1500m） 田中千景
1993夏 ﾊﾞｯﾌｧﾛｰ				（バレーボール） 今野裕美子		（ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ・ ﾌﾙｰﾚ団体） 柳澤純子（卒） （サッカー） 佐藤恵子（卒）		
1995冬 ﾊｶ				（ｽｹｰﾄ・ｼｮｰﾄﾄﾗｯｸ 3000mﾘﾚｰ） 田中千景 小原貴枝				
1995 福岡	（陸上競技・ マラソン） 草薙量子（卒）	（バレーボール） 今野裕美子			（体操・団体総合） 岡真紀子 （体操・新体操 個人総合） 山尾朱子 （体操・新体操 種目別・こん棒） 山尾朱子 （体操・新体操 種目別・リボン） 山尾朱子	（体操・新体操 種目別・なわ） 山尾朱子 （体操・新体操 種目別・ボール） 山尾朱子	（陸上競技・ 1600mﾘﾚｰ） 玉手由子	
計	2（4人）	5（6人）	0	5（6人）	8（9人）	11（13人）	4	3

注）（卒）は卒業生である。（卒）が記されていない名は学生である。

計38（45人）
（実人数24人）

1986年第6回世界女子ソフトボール選手権大会に鈴木久美ら5名の学生を送り、1994年の第8回大会には4年生大島慈子が出場した。ようやく、アジア大会競技になるのは1990年第11回北京大会で、オリンピック競技採用は今年（1996年）から、ユニバーシアード競技には採用されていない。北京大会には卒業生で実業団日本電装所属の組島千登美が、1994年第12回広島大会には大島が出場し共に、銀メダルを獲得した。

③新しく出場開始した競技

（水泳、ウエイトリフティング、ハンドボール、サッカー）

水泳は1985年神戸ユニバーシアード大会に初めて出場した。短大2年生松木芙美子と短大卒業生高橋真紀子である。松木は3種目に出場し800mリレーで5位に入賞、高橋は4種目に出場し800mリレーで5位、400mリレーで8位に入賞した。

ハンドボールは1976年第21回モントリオール大会でオリンピック競技となったが、日本の女子はこの大会のみに出場している。ユニバーシアード大会にはまだ競技は採用されておらず、アジア競技大会は1990年第11回北京大会から採用された。本学競技者の国際的活躍はこの時からであり、村山みどりは4年生で北京大会に出場し5位に入賞、実業団シャトレーゼに所属の1994年には第12回広島大会にも出場し2位となった。1995年には村山、実業団大崎電機所属今野清美、2年生児島愛が世界選手権に出場し13位となった。

ウエイトリフティングは長い間男子の専有する競技であったが、女性観の変化により、女子競技者も現れ、1987年には第1回世界選手権も開催されるまでになった。わが国女子初の公認記録を持つウエイトリフティングのパイオニアが卒業生で埼玉栄高校教員の長谷場久美である。在学中は陸上競技砲丸投げで日本選手権6位になるなどの活躍をしていた。毎年行われる世界選手権代表に第1回から9回まで選ばれたが、8回のみ出場を辞退している。世界選手権で2個の銀メダル、アジア大会競技となった1990年北京大会、さらに1994年広島大会でも銀メダルを獲得した。

最後に国際大会出場を果たしたのがサッカーである。サッカーも長い間、男子競技とみなされていたが、近年はそのような考えはなくなり、アジア競技大会では1990年第11回北京大会から、ユニバーシアード大会では1993年のみに実施され、ついには今年（1996年）のアトランタオリンピックでも実施される。本学唯一の出場者は短大卒業生の佐藤恵子である。1993年ユニバーシアードバッファロー大会で6位に入賞した。

3　入賞者一覧表について

表２はオリンピック競技大会本学競技者入賞者一覧、表３はアジア競技大会本学競技者入賞者一覧、表４はユニバーシアード大会本学競技者入賞者一覧である。今回，世界選手権大会については開催頻度が異なること、一部確認できなかった記録があるなどの理由から省いた。

オリンピック競技大会においては5件、延べ10人、実人数7人が入賞した。

アジア競技大会においては30件、延べ37人、実人数24人が入賞し、ユニバーシアード大会においては38件、延べ45人、実人数24人が入賞した。

オリンピックメダリストとして記録されるのは、バレーボール銀メダルの井上節子、福中佐知子のみである。

アジア大会においては金メダリストがバレーボールの斎藤春枝と新体操の川本ゆかりの二人、銀メダリストが陸上競技の渋沢、茂木、櫛渕、フェンシングの弥富、高柳、カヌーの小林、新井、ウエイトリフティングの長谷場、ソフトボールの組島、大島、ハンドボールの村山の11人（延べ13人、長谷場、小林が各2個）、銅メダリストが陸上競技の櫛渕、森、平山、増田、佐藤、テニスの米沢、フェンシングの宮原、中山、金澤、高柳、カヌーの小林、新井、望月の13人（延べ15人、宮原、高柳が各2個）である。

ユニバーシアード大会においては金メダリストがバレーボールの井上節子、福中佐知子、斎藤春枝、マラソンの草萱昌子の4人、銀メダリストがバレー

ボールの斎藤春枝、大渕優子、今野裕子、体操の鈴木和代、新体操の川本ゆかりの5人（延べ6人、川本が2個）で銅メダリストはいない。

オリンピック競技大会で入賞すること、メダリストになることが当然のことながら最も困難である。アジア競技大会とユニバーシアード大会の入賞実人数は同じであるが、実施回数が異なるのでアジア競技大会の方が本学競技者にとって入賞しやすいことになる。最近では、アジア競技大会の多くの競技にメダリストが現れている。

まとめ

本研究の目的は主要国際競技大会としてのオリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード大会、主要世界選手権大会の本学の出場者とその成績の実際について明らかにして一覧表を作成し、本学競技者の年代別、競技別特徴について考察することであった。

各大会の出場者氏名、学年、卒業生であれば就職先、競技記録を、一部遺漏はあるものの記録することができた。一覧表により本学のこれまでの主要国際競技大会出場者、成績の全貌を知ることができた。

これらから、本学の国際競技大会出場の過程は各期の特徴により三期に分けることができることが明らかとなった。第一期は1954年の初出場から1960年代までであり、体操、バレーボールが活躍した時代である。第二期は1970（昭和45）年から1983（昭和58）年までであり多様化を遂げた時代である。陸上競技、ソフトボール、スケート、トランポリン、カヌー、フェンシング、卓球、テニスの出場開始があった。第三期は1984（昭和59）年ロサンゼルスオリンピック以降の活躍時代であり、各大会の出場者が増え、既に出場していた競技の引き続きあるいは再出場および水泳、重量挙げ、ハンドボール、サッカーの出場開始の時代である。

成績についてみると、オリンピック競技大会においては5件、延べ10人、実人数7人が、アジア競技大会においては30件、延べ37人、実人数24人が、ユニバーシアード大会においては38件、延べ45人、実人数24人が入賞した。オリンピックメダリストはバレーボール銀メダルの井上節子、福中佐知子のみである。

アジア大会においては金メダリストが二人、銀メダリストが11人（延べ13人、銅メダリストが13人（延べ15人）である。

ユニバーシアード大会においては金メダリストが4人、銀メダリストが5人（延べ6人）で銅メダリストはいない

本学競技者にとってオリンピック競技大会で入賞することが最も困難で、アジア競技大会が入賞しやすい。オリンピック競技大会、ユニバーシアード大会ではバレーボール、体操の入賞、アジア競技大会では陸上競技の入賞が目立つ。最近では、アジア競技大会の新競技の採用による本学競技者の出場により多くの競技にメダリストが現れている

本研究の所期の目的は達成することができたが、今後は今回の研究を基としてさらに補い、より完全な記録としたい。さらに今回報告することができなかった国内の記録についてもまとめていきたい。

注）

1) 掛水通子、阿江美恵子、雨ヶ崎俊子、「本学競技者に関する研究（1）一日本女子競技者および本学競技者の総合国際競技大会への参加拡大傾向について一」、本紀要所収.

2) 東京教育大学サッカー部編、**東京教育大学サッカー部史**、恒文社、1974年.Pp.421.

3) 学校法人専修大学編集、**専修大学スポーツ記録1933-83**、専修大学出版局、1983年.Pp.529. およびニューピーアール編集、**専修大学体育会50年史　人国記**、専修大学出版局、1983年.Pp.809.

4) 実際には調査の結果、前身の私立東京女子体操学校、私立東京女子体操音楽学校、東京女子体育専門学校の卒業生には主要国際競技大会に選手として参加した者はなかった。

5) 文藝春秋編、**昭和スポーツ列伝**、文藝春秋、1992年.p.90-92.

6)　日本体育協会、**日本体育協会七十五年史**、財団法人日本体育協会、1986年.p.635.

7)　小泉志津男、**日本バレーボール五輪秘話③松平全日本の奇跡**、ベースボールマガジン社、1992年.p.192-208.

8)　信濃毎日新聞社編集局、「スケート　小野沢良子　札幌五輪スピード代表」**スポーツ山脈一信州　あの人はいま**、信濃毎日新聞社、1992年.p.302-4.

9)　古代ギリシャにおいては、オリンピア祭等四大競技祭を巡回して優勝した者は巡回優勝者として、讃えられた。それにならい本研究では三大会の巡回、あるいは二大会の複数回参加者を巡回競技者とする。

文献

1.　ブルガリア新体操協会／日本体操協会新体操委員会編著、**ＬＡＵＲＥＬＳ　ＯＦ　ＢＥＡＵＴＹ（ﾛｰﾚﾙｽﾞ　ｵﾌﾞ　ﾋﾞｭｰﾃｨ）一写真でみる新体操の歴史**、中教出版、1989年.

2.　文藝春秋編、**昭和スポーツ列伝**、文藝春秋、1992年.Pp.461.

3.　**第12回アジア競技大会広島1994公式写真集**、ぴあ、1994年.

4.　ＩＭＳ／ＳＴＵＤＩＯ　6、ベースボール・マガジン社編、**第24回オリンピック競技大会・ソウル1988、国際オリンピック委員会、ソウルオリンピック組織委員会オフィシャルブック**、1988年. Pp.235.

5.　ＩＭＳ／ＳＴＵＤＩＯ　6、ベースボール・マガジン社編、**第25回オリンピック競技大会バルセロナ1992　日本オリンピック委員会＜ＪＯＣ＞公認記録写真集**、1992. Pp.235.

6.　株式会社タマス卓球レポート編集部、**卓球レポート**、21巻6号（通号239号）、1977年6月、p.22-57.

7.　岸野雄三他編、**新版近代体育スポーツ年表**、大修館書店、1986年. Pp.349.

8.　日外アソシエーツ、**スポーツ人名事典増補改訂版**、日外アソシエーツ、1995年.Pp.626.

9.　日本オリンピック・アカデミー編、**オリンピック事典**、プレスギムナチカ、1981年. Pp.820.

10.　スポーツイベント社、**スポーツイベント・ハンドボール**、1996年2月号、p. 58-59、3月号p.32-33.

11.　スポーツ記録編集委員会、**一九九二年版スポーツ記録**、教育社、1992年. Pp.1212.

12.　社団法人日本スケート連盟、**日本のスケート発達史**、ベースボールマガジン社、1981年.Pp.493.

13.　東京女子体育大学学生部所蔵、昭和48年から平成元年**「競技会出場成績報告書」**、平成3年から6年**「各種競技大会成績」**

14.　東京女子体育大学後援会所蔵、**「学園だより」**昭和39年5月号、および**「学園便り」**創刊号（昭和41年7月1日）から72号（平成7年12月25日）

15.　財団法人日本オリンピック委員会企画・監修、**近代オリンピック100年の歩み**、ベースボール・マガジン社、1994年. Pp.461.

16.　財団法人日本オリンピック委員会編、**日本オリンピック委員会要覧**、財団法人日本オリンピック委員会、1993年.

17.　財団法人日本オリンピック委員会編、**ＯＬＹＭＰＩＡＮ** 4-9 1995年.P.51-55.

18.　財団法人日本体育協会編、**第15回オリンピック大会報告書**、財団法人日本体育協会、1953年.Pp.672.（含**第6回オリンピック冬季大会報告書**）

19.　財団法人日本体育協会編、**第16回オリンピアード大会報告書**、財団法人日本体育協会、1958年.Pp.579.（含**第7回オリンピック冬季大会報告書**）

20.　財団法人日本体育協会編、**第17回オリンピック大会報告書**、財団法人日本体育協会、1962年.Pp.636.（含**第8回オリンピック冬季大会報告書**）

21.　財団法人日本体育協会編、**第18回オリンピ**

ック競技大会報告書、財団法人日本体育協会、1965年. Pp.733.（含**第9回冬季オリンピック競技大会報告書**）

22. 財団法人日本体育協会編、**第19回オリンピック競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、1969年. Pp.730.（含**第10回オリンピック冬季競技大会報告書**）

23. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第20回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会**、日本オリンピック委員会、1973年. Pp.428.

24. **第20回オリンピック競技大会日本選手団員名簿**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会. Pp.47.

25. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第21回オリンピック競技大会報告書、財団法人日本体育協会**、日本オリンピック委員会、1976年. Pp.476.

26. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第22回オリンピック競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1981年. Pp.240.

27. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第23回オリンピック競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1984年. Pp.518.

28. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第24回オリンピック競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1989年. Pp.606.

29. 財団法人日本オリンピック委員会編、**第25回オリンピック競技大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会、1993年.Pp.612.

30. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第11回オリンピック冬季競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1972年. Pp.162.

31. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第12回オリンピック冬季競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1976年.Pp.139.

32. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第13回オリンピック冬季競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1980年. Pp.139.

33. 財団法人日本オリンピック委員会編、**第14回オリンピック冬季競技大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会1984年. Pp.146.

34. 財団法人日本オリンピック委員会編、**第15回オリンピック冬季競技大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会1988年. Pp.174.

35. 財団法人日本オリンピック委員会編、**第16回オリンピック冬季競技大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会、1992年. Pp.248.

36. 財団法人日本オリンピック委員会編、**第17回オリンピック冬季競技大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会、1994年.Pp.236.

37. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第7回アジア競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1974年. Pp.221.

38. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第8回アジア競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1979年. Pp.350.

39. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、第9回アジア競技大会報告書、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1983年. Pp.362.

40. 財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会編、**第10回アジア競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1987年. Pp.484.

41. 財団法人日本オリンピック委員会編、**第11回アジア競技大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会、1991年. Pp.732.

42. 財団法人日本オリンピック委員会編、**第12回アジア競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、日本オリンピック委員会、1995年.Pp.752.

43. 財団法人日本体育協会編、**第1回冬季アジア競技大会報告書**、財団法人日本体育協会、1986年. Pp.104
44. **1965年ユニバーシアード大会日本代表選手団名簿**、Pp.32.
45. 財団法人日本体育協会編、1965年夏季／1966年冬季ユニバーシアード大会報告書、財団法人日本体育協会.1966年. Pp.181.
46. 1966 Universiade Winter World Games Japanese Delegation. Pp.13.
47. 1968 Universiade Delegation.Pp.29.
48. 財団法人日本体育協会編、**一九六七夏季／一九六八冬季ユニバーシアード大会報告書**、財団法人日本体育協会.1968年.Pp.391.
49. 財団法人日本体育協会編、**1970年ユニバーシアード競技大会報告書**、財団法人日本体育協会.1971年. Pp.174.
50. 財団法人日本体育協会編、**1977年ユニバーシアード夏季競技大会報告書**、体育協会.1977年. Pp.150.
51. 財団法人日本体育協会編、**1979年ユニバーシアード夏季大会報告書**、財団 法人日本体育協会.1979年. Pp.196.
52. 財団法人日本体育協会編、**1981年ユニバーシアード冬季大会報告書**、財団法人日本体育協会.1981年. Pp.110.
53. 財団法人日本体育協会編、**1981年ユニバーシアード夏季大会報告書**、財団法人日本体育協会.1982年. Pp.212.
54. 財団法人日本体育協会編、**1983年ユニバーシアード冬季大会報告書**、財団法人日本体育協会.1983年. Pp.112.
55. 財団法人日本体育協会編、**1983年ユニバーシアード夏季大会報告書**、財団法人日本体育協会.1983年. Pp.228.
56. 財団法人日本体育協会編、**1985年ユニバーシアード冬季大会報告書**、財団法人日本体育協会.1985年.Pp.114.
57. 財団法人日本体育協会編、**1985年ユニバーシアード夏季大会報告書**、財団法人日本体育協会.1985年. Pp236..
58. 財団法人日本体育協会編、**1987年ユニバーシアード冬季大会報告書**、財団法人日本体育協会、1987年、Pp112.
59. 財団法人日本体育協会編、**1987年ユニバーシアード夏季大会報告書**、財団法人日本体育協会、1987年. Pp.250.
60. 財団法人日本体育協会編、**1989年ユニバーシアード冬季大会報告書**、財団法人日本体育協会.1989年. Pp.140.
61. 財団法人日本オリンピック委員会編、**1989年ユニバーシアード夏季大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会.1989年. Pp.159.
62. 財団法人日本オリンピック委員会編、**1991年ユニバーシアード冬季大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会.1991年. Pp.138.
63. 財団法人日本オリンピック委員会編、**1991年ユニバーシアード夏季大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会.1992年.Pp.240.
64. 財団法人日本オリンピック委員会編、**1993年ユニバーシアード冬季大会報告書**、財団法人日本オリンピック委員会.1993年. Pp.236.
65. 財団法人日本オリンピック委員会編、**1993年ユニバーシアード夏季大会報告書**、財団法人日本体育協会.1993年. Pp.236.
66. 財団法人 日本体育協会編、**日本アマチュアスポーツ年鑑**、ベースボールマガジン社、1978年から1995年.
67. 財団法人 日本体育協会、**日本体育協会七十五年史**、財団法人日本体育協会、1986年. Pp.1380.
68. 財団法人 日本体育協会監修、**最新スポーツ大事典資料編**、大修館書店、1987年. Pp.312.
69. 財団法人日本体育協会編、**体協時報**、103号（1961年9月）、432号（1989年8月）、450号（1991年2月）、474号（1993年2月）
70. 財団法人日本体操連盟編、**体操**、51号（1985年7月）から86号（1994年4月）

謝辞

本研究の資料収集・確認に当たり、お忙しい中にもかかわらずご協力戴きました下記諸先生方に厚く御礼申し上げます。

森直幹、加茂佳子、関田史保子、長谷川洋子、
秋山エリカ、吉野みね子、細田きみ子、
秋山慎三、加室一臣、長谷場久美、本田宗洋
（順不同・敬称略）